

天保八年

女学校発起之趣意



あはれおのれ

人

物

山保花

石むらねのよ

女學校發起之趣意

謹おのれ我

大津國を北極地を出るまで三十度より四十二度以内

河のて四季の氣候よくとのい地中金粟多くして水清く甘

土硬く堅きが故に其水土よるれ其氣候をうけて生るる

美の物よる美づの國よ優まり是を以て中隸を豊草

原乃水穂の國といふ水穂を福穀の總名といふ今乃

かも
 なる水穂ふ美づを合ありて御神のあづけ給ふ
 そのあつらひに水穂を食くひて生育せいよくする人乃性
 らんば是亦美づの國より優すぐること自然しぜんの道理どうりを以て
 大和魂大和心やまとこころともいふなりさればちと開闢かいびやくの古より外
 國こくよにたふしきる事なくして津日の津つひに継つぎ絶つぎせど世界せかいの福ふく立
 して遠とほく西の國の書しよも傳でん統とうの帝國ていこくと海うみもあつたを
 心こころもそとをききととあつて此二百餘年
 神祖かみその津武徳つぶとくよりして四海しよかい干戈かんかをわきもれ睦むつとあり

二

東北とうほくのかぎりある外そとが濱なまふ生なままゝ一者ひとも西にしの南みなみのきりある
 長崎ながさきの人ひとは使つかれぬぬの隅すみなる新あらた鴻つるぎ小こ使つかりて東南とうなんの端はた
 なる能あたが浦うらの男おとこを夫つまとして美みづの民たみ己おのれがまゝよく業わざと
 安やすんどゆゑに昇あが平へいの因よ澤ざい小こ浴よくもろそ人ひと間ま世よ乃の幸さいひ此
 よもなき有りごとく事ことあるもよとやさねど治ち平へい長ながく遠とほく
 時ときを上下じやうげ奢侈しやうぎ後ご遊ゆう情じやうとあることをたえしあることを支しぬ
 の書しよも見みて昔いひより鴻つるぎ儒にゆの論ろんもろ所ところあるが雀すずめ情じやうを以て辭ことばを
 能あたきしゆゑに其その弊へい男おとこよりも女めづもあつたゝ然しかる

六

七

昔り先十女等ののせありれほりたるよりして彼も言き床の上
 落ぐらきこまよ居りて淨瑠璃を落るれば見物上見への
 上落しきを好く後者の舞臺顔と真似て化粧がりの
 なもども例てつるよきハ様少といや一きみのこたるを
 素人の名も後入やせよげある女などありたのびをより
 こ一もあつる清女がツル一類とてえらる一き事どり一
 そ外女も似氣あるよ異なる化粧の仕方を好む旅も日ごと
 まざらざらけまばあふよらぞ元来古等の町藝者考
 四

場茶屋女らどハるを粥籠りのあるもハ髪結女も髪を結
 ハせ湯屋の男も髪を洗つて丸の事あるもど是も素
 人ハ桂うりたる故町と女髪結多出来湯屋の田圃開が
 しくなうり下流空りて濁るとまきハ逆して上流を濁
 まるよいくる如く右の弊風自然とよこみおがを道理
 あり武家ももろといや一き風俗の女もつるを款りき
 事あるもどや叔又女子の疵といハ琴之味原胡弓鼓笛
 古鼓踊等の遊麗をぬき心のやうよき之機織り糸とる

事ハいつたさへも物違ものちがひを思ふをさへいやくきわむの

やうふ思ふ風俗ふうぞくとありたり故ゆゑに身上しんかうにおおむるものそ

幼いぢやきより娘むすめの踊おどを思ふを多おほくの金錢かねを費つひやして衣裳いさやうた

具ぐを思おもひらうたのさへひかこの参まゐりあはれ親おやも但ただし

うかまそ付つきほあふ見みえよきまがいき淨瑠璃じやうるり狂言きやうげんを

そ子この踊おどらせ舟ふねの下したをのぞき見み物ものを思おもふなまわり

ざう一ひと踊おどを思おもひらうたの参まゐりあはれ思おもふは遠とほ

ふく子供こどもといやくき風俗ふうぞくを仕つかはさるまの思おもひは遠とほ

五

ふて志こころも年としよりてハ用もちきぬ獲とちりもこふは遠とほは遠とほ

鼓この思おもひ生なま涯げの用もちきぬ鼓この思おもひは遠とほは遠とほ

ある中なかも胡こらハやく悲かな人の女むすめを思おもふの思おもひは遠とほ

ふて素す人の娘むすめ子供の舞まが思おもひは遠とほは遠とほ

いふものぞり弾はんと思おもひは遠とほは遠とほ

合あひて思おもひは遠とほは遠とほ

すすきりぞり思おもひは遠とほは遠とほ

子供の教ま方かた嚴げんしり思おもひは遠とほは遠とほ

ねぶづきを招くの氣も入らざる故師匠の方より子供の
 様嫌きげんをなすやうにせられ子供は位法中のなりを
 ありと殊ことふたの伎藝ぎげい人等ひとらが志しをまねておぼろの浴ゆ
 衣いと浴ゆひの手拭てぬぎを深こくを社まやちう申う上う賣うりは若わかく遊あそ山さんを
 位かみ一つ頭づ上う不つ造つり弄なまをさそせ大勢おほしをむきほきて遊あそ場ば
 其で弟子でしの多おほきこといふを聞きとてたふをど手習てなひ師匠ししやうの方ほう
 業ごう六むあるまじき事ことにたをを以もつて風俗ふうぞくのいやくとなり
 ちりちりをあそぶまじき男子おんこよき師しをとり身を備そなへ道みちを

ありとむれど女おんなとしていふまじきもの希まれなる故ゆゑふたの法ほう
 事ことを志しまじくして女おんなの悪あく風ふうとなりゆく事ことは惜あはしめ次つぎ才さい
 ありとむれど女おんなとしていふまじきもの希まれなる故ゆゑふたの法ほう

御國みくにの嘉穀かこくの種ねくりにともて肥こ培やの仕し方かた悪あくき時ときは知る
 病い害やうをなほさるるゆゑり人ひとも小天地せうてんちよて其母そのははを地ちあらんば
 地ち性せうよく肥こ培やの仕し方かたもき時ときは善ぜん人じんを生うまへ地ち性せうありて肥
 培この仕し方かたよかざる時ときを悪あく人じんを生うまへるは天てん自然じぜんの道みち
 理りありせんば

神功皇后を神懷妊の神水をもて三韓を伐征へ給ふ
神武徳備はるを給ふおも其神腹より神誕生はれませし
應神帝を八幡宮と崇め奉り我

神國の武威をもちて給ふ神とをなせ給ひけし
朝比奈義秀が勇はる毎巴山岳の勇をむきお獲ち射取の
賢はる母禪尼の賢を稟たる十のふてよく其理を志るべき
事なり胎教とて婦人懷妊はれ給ふ胎を側ぞ坐せ給ふ
雲にぞ立の波せ給ふ邪味を食せ給ふ左道と腹ぞ割

正しくも給ふ念せ給ふ席正しくも給ふ坐せ給ふ目も
父を見む耳よ悪き聲を聴む父よ悪き言を言せ給ふ
悪き言を言せ給ふ心よ悪き書を讀む朝よ起て立居振舞を
正しくも給ふ生る子に容端正しくも徳人の徳と
ゆりおれ胎教をもち給ふ徳ふて人よ姓と習とぬれ給ふ武家
忠孝義勇の子孫を没する事をも給ふ頼るべし給ふ
容より心掛のよき女を撰びて妻とすべき事とて地み
よおる母の心け給ふ人よ友人を出生し給ふ長刀ふた刀

武人をお養ひまこと疑ふ町人の

妻としていふはよき時、實體は我家業を福くしき

子もお生むとて江戸子といふ者、身よ持ちしど不持

の多きを其根本母の心色よりぬ故の事ぞう、後後の

奥へ初年より奉公し出し、生涯を仕させん事を頼ふ

人の事いふと、外へ縁づけんと思ふ、掛の親達ハ

もよふ古き水遊藝をおる、むらさき世に用あるとて

よき子孫の程と前んぞ欲する田地ハ、よぬ肥培の

は方へ婦人の和らぎ順ひて、自信り情深く静なるは

とて女の法を志し、きんと欲するよき先物、讀とていふ

支那の書を讀み、その文章をうらみ、婦人くハ女よ似る

きやう、源氏物語をよみ、見く学問の志、こふより却て害

ともあるものなれ、唯和解の女、孝順女、大學生の程、

そ外、漢文よるよ、よむ仮交りの文章、やび詩、おをよむ

手本として、手習ひさせ、その志を中なり、やうり、況列をよむ

よ、後一又女子の第一の儀を志し、きりて、一第の慎み

を

後ふあれれいぶもぎら流りと伊勢流いせりゅうちりちりとあつげのあつげ
 べーちきちき長ち刀ち小ち刀ちあちのち武ち執ちをち女ちあちらちまちらちいち尚ち何ちのち世ちよちいち
 似ち家ちをちきちやちうちふちつち人ちもちあちるちぐちらちれちどち武ち士ちのち娘ちをちいちふちれちおちんち
 町ち人ちの子ちふちてちもち徳ち後ちのち奥ちよち一ち生ちまちはちせちんちとち欲ちもちらち人ちらちちち
 もち税ち多ち古ちよちびちぎち車ちとち奥ち向ちのち男ち子ちのち勤ち仕ちもちるち者ちあちけちもちぞち
 恥ちたちのちそちのち心ちをちあちるちぎちもちりちとち扱ち又ち織ち造ち仿ち績ちのち車ち女ちのち
 才ち一ちとちもちるち業ちあちるちもち一ちやち一ちきち車ちのちやちうちふちおちひちてち今ちのち縫ち物ち
 へちいちせちぬち女ちのちあちらちさちいちつちあちるち浅ちやち一ちきち車ちもちいちりちりち

天子てんしのち御ち座ちさちらち自ちらちらちりちぬちひち一ち筋ちひちとち一ち業ちもち
 関ちりちなちらちいち家ち富ち人ち多ちくちはちひちてち物ち造ち女ちとち百ちはちうち才ち
 ちちりちとちもち少ち一ちハち熱ちふちもちあちらちるちぎちもちりちあちるちまちをちそちんちめちらち付ちハち
 本ち綿ちのち布ち子ちもち容ち易ちよちハち急ちとちいち真ち加ちをち知ちりち賢ち人ち
 素ちをちとちやちらちるちあちらちるち車ちとち固ちてちあちらちふち少ち女ちのち為ちふち女ちもち校ち堂ち
 いちふちのちをち津ち府ち内ちあちらちふち建ち女ち少ちてち文ち字ちもち可ちくちうちもちんち和ちやち
 のち手ち跡ちをちいちらちるちもちらちるちものちをち師ちとちしちてち扱ちをち右ちよち中ちやちくち女ち
 子ちのち教ち訓ちあちらちるちぎち筋ちのち車ちとちまちをち手ちかちとちあちりちてち書ちおちるちいちせち

中ちやう道理を説ふ一才一規則を嚴うして好儀を
 志つけ積ふし一室より毎日常に今自をきつち
 て和分の師頼方のあまの師出席してまほこの
 疵ををへ一扱物縫ひ機を織り糸をとり糸を揃む事
 をしつ女共を抱置て是亦好この事ををわつせぬ法
 知を立て教諭ししは知きものひは白糸の如くあれ
 自然とよき風ふ深くて無き風ふそまらば子孫の種を
 前よよき田地の肥培の仕うとなひお付 十日あり

中ちやう道理を説ふ一才一規則を嚴うして好儀を
 志つけ積ふし一室より毎日常に今自をきつち
 て和分の師頼方のあまの師出席してまほこの
 疵ををへ一扱物縫ひ機を織り糸をとり糸を揃む事
 をしつ女共を抱置て是亦好この事ををわつせぬ法
 知を立て教諭ししは知きものひは白糸の如くあれ
 自然とよき風ふ深くて無き風ふそまらば子孫の種を
 前よよき田地の肥培の仕うとなひお付 十日あり

むむむものなを案

東都西久保

天保八年丁酉冬十月

城山

奥邨喜三郎藤原増馳誌

2

44

23

報

司のや

